

## 北海道余市紅志高等学校

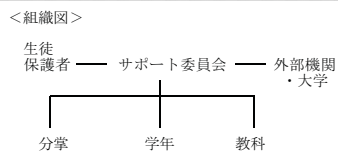
課程 全日制  
学科 総合学科  
生徒数 214名

### 1 取組の特徴

平成22年度に管内唯一の総合学科として開校し、1学年生徒に必修科目「産業社会と人間」を学習させている。この科目の単元目標に、「キャリア教育の充実」と「コミュニケーションスキルの育成」を設定し、生徒のキャリア発達の向上を図った。

### 2 取組のねらい

人間関係を上手に構築できないことにより不安定な心理状態となり、高校生活を有意義に送ることができない生徒に対して、授業や地域との交流、ボランティア活動等を通じてコミュニケーション能力を向上させることを目的として、取り組んでいる。



### 3 取組の経過

4月 サポート委員会発足	9月 第3回「産業社会と人間」
7月 第1回アセス実施 第1回「産業社会と人間」	第4回「産業社会と人間」
8月 第2回「産業社会と人間」	10月 第5回「産業社会と人間」
	1月 第2回アセス実施

### 4 取組の内容

#### (1) 第1回学級適応検査等の状況

ア 日時 7月6日(水曜日)  
イ 対象 1学年  
ウ 検査結果 要支援領域と生活満足感の適応度について、それぞれ24.6%の生徒が要支援対象にあることがわかった。  
エ 分析結果 要支援領域の生徒と生活満足感の適応度が低い生徒は同一ではなく、適応度は高いのに満足感が低い生徒への支援策が必要。

	適応次元	要支援生徒数
1学年	生活満足感	24.6%
	対人的適応	17.4%
	学習的適応	7.3%

#### (2) コミュニケーションスキル向上トレーニング

ア 日時 7月20日(水曜日)  
イ 対象 1学年  
ウ ねらい コーピングリレーションの学習目標について知ろう  
エ 内容 交流ゲーム、リラクゼーション、スマイルトレーニング  
オ 成果と課題  
・実施後のアンケートでは、全体の91%の生徒が「わかりやすかった」、「理解できた」と回答するなど、コミュニケーションスキルの向上が図られる手立てとなった。  
・生徒のトレーニングへの取り組みを一層促すために、事前学習を行うなど計画的・組織的な指導体制の整備が必要である。

#### (3) 心の法則に係る講話

ア 日時 8月31日(水曜日)  
イ 対象 1学年  
ウ ねらい 心の法則について知ろう  
エ 内容 心の法則ABC  
オ 成果と課題  
・生徒から「考え方のクセがわかったのは、特に面白かった」などの感想があり、あらためて自分の心について考えることができた。  
・生徒に一層の興味・関心を持たせるために、コミュニケーションスキル向上トレーニングの実施から本講話の実施までの期間を短くする必要がある。



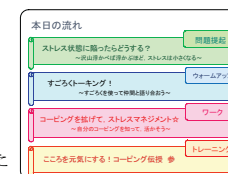
#### (4) 筋弛緩法体験研修

ア 日時 9月21日(水曜日)  
イ 対象 1学年  
ウ ねらい 行動とストレスの関係を知ろう  
エ 内容 社会的スキルについて、筋弛緩法



#### (5) コミュニケーショントレーニング

ア 日時 9月27日(水曜日)  
イ 対象 1学年  
ウ ねらい 会話上手になろう  
エ 内容 聞き方のコツ、断り方のコツ、アサーション  
オ 成果と課題  
・実施直後は、生徒同士の交流が難しいグループもあったが、徐々に積極的に交流することができるようになった。



#### (6) 問題解決ミーティング

ア 日時 10月5日(水曜日)  
イ 対象 1学年  
ウ ねらい 問題解決のコツを知ろう  
エ 内容 問題解決ミーティング  
オ 成果と課題  
・生徒が本研究事業の趣旨を理解するようになったことから、グループ内の話し合いが活発に行われるようになってきた。  
・グループ内で積極的に話し合いに参加できない生徒に対して誘うことができるような集団づくりが必要である。

(7) 第2回学級適応検査等の状況調査

ア 日時 1月18日(水曜日)

イ 対象 1学年

ウ 検査結果 要支援領域に10名、生活満足感の適応度では9名が要支援。

エ 分析結果

1回目の調査に比べ、すべてのクラスで不適応群、不満足群ともに減少した。学習的適応については、若干低下したクラスが見られたが、全体としては、教師や友人の支えを感じることができ、生活満足感が高まったと考えられる。

	適応次元	要支援生徒数(7月)	要支援生徒数(11月)	増減
1学年	生活満足感	24.6%	13.0%	-11.6ポイント
	対人的適応	17.4%	10.1%	-7.3ポイント
	学習的適応	7.3%	4.4%	-2.9ポイント

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

#### (1) 中途退学者及び不登校生徒数の推移

・学校全体の退学者数は、平成22年度に比べ平成23年度は6名増えたが、1学年の不登校生徒数は平成22年度の7名に比べ平成23年度は0名と減少した。

#### (2) 学級適応検査等の結果

・学習的適応がクラスによって、最大8ポイント下降したが、生活満足度は最大20ポイント上昇した。全てのクラスにおいて、「教師サポート」と「友人サポート」ともに40ポイント以上増加した。

#### (3) その他の指標による評価

・保健室利用者数は減少している。頻回来室者が周囲のサポートを受けて教室に適応した結果、来室数が減ったことによる。

#### (4) 生徒の変容した姿

・クラスの枠を超えて、人間関係の輪が広がった。  
・友人同士で「こうした方が良いよ」ということを伝え合えたり、言いづらいことも伝えようとする姿勢が多く見られるようになった。

### 2 課題

(1) サポート委員会において、他学年、各教科、分掌、部活動など、それぞれで実施している取組を横断的につなげていくための話し合いが必要である。

(2) 本事業の成果の普及・発展のために、校内の教員研修の機会の充実が課題である。

(3) 生徒の変容の把握や、本事業の成果の分析のために、アセスの活用が課題である。

(4) 生徒の実態やアセスの結果などを踏まえ、支援が必要な生徒に対する教員の適切な指導が必要である。

### 3 次年度に向けて

・組織的、集団的取組とするための綿密な計画が必要であり、そのために、今年度中に、サポート委員会内における取組の具体と役割分担について、話し合い、体制を整える。

・教育相談体制の充実を図るため、アセスの分析結果を活用した校内研修を実施する。